

【開催日 /Fecha】

2024年 2月3日(土) 9時~11時

Hora de Japón: sábado, 3 de febrero de 2024, de 9.00 a 11.00 horas

■メキシコ時間

Hora de México: viernes, 2 de febrero de 2024, de 18:00 a 20:00 horas

2024年2月2日 (金) 18時~20時

一人々は様々な災害の記憶の仕方を持っている。その一つにポピュラーアートがある。災害のポピュラーアートは、その時代の人々の災害や自然とのかかわりあい方や、人々が災害をどのようにみなしていたのかを示している。すなわちポピュラーアートとは、特有の時間(T)、特有の空間(L)、特有の文化(C)において構成された、人々の災害の記憶の仕方の一部である。 このシンポジウムの狙いは、日本に特有の TLC に支えられてきたポピュラーアート、メキシコに特有の TLC に支えられてきたポピュラーアートを概観して、これらを架橋すること、すなわちインターテンポラル(T)、インターローカル(L)、インターカルチュラル(C)に結びあわせると何が生まれるのだろうと考えることにある。災害・防災のポピュラーアートについての理解を深め、よりよいリスクコミュニケーションを目指す知見を得る。

A través de la expresión artística popular, podemos descubrir que cada pueblo conserva formas diferentes de percibir, representar y recordar los desastres. El arte popular es una manifestación cultural que permite conocer cómo la población de distintas épocas entendía e interactuaba con la naturaleza; así como indagar en la forma como se explicaban y entendían los desastres. El arte, asociado con los desastres, es construido dentro de un contexto cultural (C), donde el tiempo (T) y la localidad específica (L) son determinantes.

El objetivo de este simposio es conocer y compartir ejemplos de expresiones artísticas construidas en contextos CTL puntuales de Japón y México, y tender puentes entre ellos. Es decir, se trata de reflexionar sobre lo que puede crearse desde una perspectiva intertemporal (T), interlocal (L) e intercultural (C). Este ejercicio contribuye al análisis de la expresión artística sobre los desastres y adquirir conocimientos útiles para mejorar la comunicación de riesgos dentro de las comunidades de ambos países, considerando sus tradiciones y sus formas de expresión popular.

CONTENTS

ぼうさいダックのカルチュラル・チューニング ····································	3
Sintonización cultural de "Bosai Duck"	
中野 元太 Genta Nakano	
版画に刻まれた災害―ポサーダのリトグラフと日本の鯰絵	4
Desastres en grabados: litografías de Posada y namazue (cuadro de pez gato) de Japón	
小林 貴徳 Takanori Kobayashi	
自然災害とレタブロ (エクスボト)	9
Desastres naturales y retablo	
山越 英嗣 Hidetsugu Yamakoshi	
	11
防災マンガ「精霊木の秘密」	11
シンシア エストラーダ Cynthia Paola Estrada Cabrera	
ラジオ小説『黒い川』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	12
RÍO NEGRO, RADIONOVELA	
ナシェリ・アレジャノ ARELLANO, Nasheli	
メキシコ国立防災センター	13
Comentarios al simposio	ón 9 12 13
トマス・サンチェス Tomás Sanchez	
国際シンポジウムが結んだ場、開いた地平	11
国际ノンバンプムが 福化に物、開ビに地士 El tiempo unido y el horizonte abierto por el simposio internacional	14
小林 貴徳 Takanori Kobayashi	
研究費等の助成金の成果	21
그들은 바라면 보었고 이름을 보았다. 없는 병원을 하면 보다 없는 사람들은 바다 보다 그릇을 하다 했다.	1
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	22



ぼうさいダックのカルチュラル・チューニング

中野 元太 ■ 京都大学防災研究所 | 防災教育・国際支援

ぼうさいダックは、幼児向けのカードゲームである。「津波のときは素早く高台へ逃げよう!」を示すカードには「チーター」が描かれている。いかにも"素早く"を連想させる。しかしこの連想は、必ずしも世界共通ではない。ビーチリゾートとしても有名なメキシコ・シワタネホという町では、子どもたちにとって"素早い"動物は「鹿」なのである①。

ぼうさいダックに登場する津波や火事は擬人 化され、怖い顔が描かれている。メキシコの人 にそれを見せると、自然そのものが悪者みたい だからと、笑っている顔が描かれた。あくまで も災害は社会の側に原因があると考える。だから、炎も笑顔である②。

皆さんは③の絵を見て「地震」とすぐにわかるだろうか?シワタネホの小学生に原案を描いてもらい、メキシコ人デザイナーが完成させた。少なくとも日本人の私には、地球が踊っているようにしか見えない。けれどもシワタネホの幼稚園では子どもたちから「地震だ!」と声があがる。「なぜ?」である。外部者にはわかるようで、わからない、地域に特有の価値観に基づいて防災教育教材や実践を調整・適応することをカルチュラル・チューニングと呼んでいる。











日本語

Español

Sintonización cultural de "Bosai Duck"

Genta Nakano

■ El Centro de Estudios para la Prevención de Desastres, Universidad de Kioto, Japón Educación para la Reducción de Riesgo de Desastres, Apoyo Internacional

El "Bosai Duck" es un juego de tarjetas para niños. La tarjeta que muestra "¡Huye rápidamente a terreno elevado!" que hace referencia al tsunami, trae la imagen de un guepardo. El animal se asocia con la rápidez en Japón; sin embargo, esta asociación no es necesariamente universal. En cambio, en Zihuatanejo, México, famoso por sus playas bellas, el animal que corre rápido es el venado para los niños ①.

Los tsunamis y los incendios en el "Bosai Duck" se antropomorfizan y se representan con caras enojadas. Cuando se mostraron esas caras enojadas a los mexicanos, se decidió cambiarlas por una expresión risueña porque los desastres

son construidos socialmente y la propia naturaleza no parece mala. Por eso las llamas también sonríen ②.

Cuando ves el dibujo de ③ , ¿lo reconoces inmediatamente como un "terremoto"? La imagen original fue dibujada por estudiantes de primaria de Zihuatanejo y completada por diseñadores mexicanos. Al menos a mí, que soy japonés, me parece que la tierra está bailando. En un jardín de niños de Zihuatanejo, los niños gritaron: "¡Es un terremoto! ¿Por qué?" El ajuste y la adaptación de los materiales y las prácticas de educación sobre desastres en función de los valores específicos locales se denomina sintonización cultural.

版画に刻まれた災害一ポサーダのリトグラフと日本の鯰絵

小林 貴徳 ■ 専修大学国際コミュニケーション学部 | 公共人類学、地域研究 (ラテンアメリカ)

被災の様子や復旧復興の過程を記録し伝達する媒体は、いまや写真や映像抜きには成立しない。しかもそれがインターネットを介して瞬時に世界中に届けられるのだから、地球の反対側で起きた災害であっても、私たちはたちまちその規模や被害状況を知ることができる。そうした情報通信技術こそ確立していないものの、活版印刷が一般民衆の生活に根を下ろしていた19世紀、災害を記し伝える役目を果たしたのがチラシのような出版物だった。

メキシコの民衆芸術におおきな影響を与えた 版画家ホセ・グアダルーペ・ポサーダ(José Guadalupe Posada, 185 2 19131913)は、 生涯を通じて 2 万点以上の作品を世に送り出した。亜鉛版に刻まれた繊細で迫力あるポサーダのリトグラフは、庶民向けのチラシにつぎつぎと掲載された。カラベラ(骸骨)が登場する風刺画をはじめ、独裁政権に対する皮肉や革命の高まる機運、衝撃的な事故や犯罪、信仰生活や聖母の奇蹟などその主題は多様だった。彼は並外れた想像力と鋭い批判力を武器に人間の悪辣さや愚かさ、また、民衆の享楽や不安をユーモアたっぷりに版画に刻み込んだ。そんな稀代の版画家は、作品数こそ多くないものの、地震や水害など災害の様子も描いた。



図1:倒壊する建物と民衆

f igura 1 población frente a edificios colapsados (1894 年 11 月 2 日の地震:メキシコ市)

1894年11月2日のオアハカ州・ゲレロ州 沿岸部を震源とするマグニチュード 7.4 の地震 は、近代化が急速に進み人口の著しい増加がみ られたメキシコ市を強く揺らした。ポサーダは、 倒壊する建物を前になすすべもなく天に救済を 請う民衆の様子を描き(図1)、1907年4月 14日に発生した地震(ゲレロ州沖、マグニチュー ド 7.6.6)については、メキシコ市中心部の大 通りを逃げ惑う群衆のすがたを描いた(図2)。

ポサーダが刻んだ災害リトグラフの特徴は、 異なる時期、異なる場所の災害を報じる印刷物 で再利用された点であろう。例えば、1894年



図2:大通りを避難する群衆

f igura 2: multitudes evacuando por las calles (1907 年 4 月 14 日の地震:メキシコ市)

11 月の震災を描いた版画は、のちに 1896 年に落雷で失命した女性の記事や 1904 年の暴風雨、1907 年にゲレロ州を襲った地震の記事にも用いられた。また、『恐るべき地震』『世界の終末が近い』『予言は当たる』などの衝撃的な見出しが版画に添えられたことも特徴のひとつといえる(図3~4)。そうした文言と図版の取り合わせは、人びとのあいだに広がる絶望感や終末論を強く印象づけている。ポサーダは、

急速な近代化のなかで貧富の格差が拡大し、ア ンバランスな発展を続けるメキシコ社会を皮肉 りつつ、災害は富める者にも貧しき者にも一様 に痛みや苦しみを与えるという、人間の脆弱さ を描こうとしたのかもしれない。

する日本では、太平の世が終わりを告げようと していた。庶民を中心とする町人文化が最盛期 を迎えていたこの時代、江戸の町はふたつの強 烈な外圧に晒されていた。ひとつは 1853 年に 江戸湾入口に姿を現した黒船であり、もうひと つは 1855 年 11 月 11 日 (安政 2 年 10 月 2 日) に江戸を揺らした安政江戸地震である。

当時、世界有数の大都市に成長していた江戸 では、マグニチュード 6.9 の直下型地震によっ

0

儀なくされた。そんななか、被災直後から市中 のかわら版にて大量に流布したのが鯰絵だっ た。大地の奥底に棲まう大鯰「地震鯰」が大 ポサーダが生まれた頃、太平洋の対岸に位置 暴れすることにより地震が引き起こされると いう俗信に基づく木版画は、河鍋暁斎(1831 18891889) をはじめ有名無名の多くの絵師や 戯作者によって制作され、幕府によって禁止さ れ版木が没収されるまでのわずか三カ月のあい だに 400400 種を超える鯰絵が登場した。

安政江戸地震で描かれた鯰絵の特徴は、その テーマの多様性、江戸の大衆文化の投影、そし て滑稽さである。震災直後のかわら版は、地震 の惨状や路上生活を送る被災者の姿を伝えるも

て死者は一万人以上、倒壊家屋は数万におよ

び、数えきれないほどの人びとが被災生活を余



図3:『世界の終わりは近い』 f igura 3: "Próximo Fin del Mundo" (1907年4月14日の地震:ゲレロ州)



図4:『世界の終末が近づく!』(図1と同じ版) figura 4: ¡ El Fin del Mundo Está Se aproxima! (1912年12月19日の地震:メキシコ市)



図5:鹿島大神宮託曰(黄雀文庫蔵) figura 5: Oráculo del dios Kashima



図6:庶民を襲う大鯰(国際日本文化研究センター蔵) figura 6: El gran pez gato que ataca a la gente común

のだったが(図5)、やがて、まだ続く余震の 鎮静を願い、地震の制圧や鯰退治を描く「護符 的」鯰絵が登場した(図6~7)。復興が進む 頃には、大鯰が持丸(富裕層)に小判を吐かせ、 大工や左官など復興景気で潤う一部の職人が小 判を拾う様子が描かれた(図8)。凝り固まっ た権力構造を打破し、新たな社会を生み出そう という「世直し」鯰絵が人気を博したという。

地震発生からの経過時間とともに少しずつ テーマが移りかわっていったとみられるが、い ずれにせよ、鯰絵は地震を「絶望」や「世界の 終末」として描いたものではなかった。小松和 彦や北原糸子らが論じているように、外国船の 到来や幕藩体制の動揺など「世の末」を思わせ る江戸末期において、大鯰は人々が抱いていた 大きな不安を和らげる役割を担った。鯰絵は、 当時の民衆文化を巧みに反映させつつ、幕末に おける社会変革への不安と期待がユーモアたっ ぷりに描かれたのである。

一方は革命前夜のメキシコ市、他方は幕末の江 戸、いずれも著しい社会変化を迎えた首都を揺ら した大災害の記録である。現代のような情報通信 技術も機器もなく、写真や映像があるわけでもな かった。しかし、それでもポサーダの災害リトグラ フと多彩な鯰絵は、当時の人びとが災害をどう受 け止めようとしていたのか私たちに伝えてくれる。 世界の終末とみたのか、世直しとみたのか。被災 者の憂いと絶望、復興に向けた励ましとユーモア、 写真や映像には写りきらない、人びとの想像力が そこには込められている。



図7:しんよし原大なまづゆらひ(国際日本文化研究センター蔵) figura 7 : El gran pez gato en el Barrio Yoshiwara



図8: 持丸たからの出船 (黄雀文庫蔵) figura 8 : El pez gato hace vomitar a los ricos

〈参考文献/Bibliogra fía〉

アウエハント、C.

2013『鯰絵一民俗的想像力の世界』小松和彦ほか訳、岩波書店.国立歴史民俗博物館編 2021『鯰絵のイマジネーション―黄雀文庫所蔵』、国立歴史民俗博物館.宮田登/高田衛監修 1995『鯰絵一震災と日本文化』、里文出版

Becerra Prado, Gonzalo

2018 "Los terremotos en la obra de José Guadalupe Posada", Espacio Diseño, núm. 255, Boletín de DCAD UAM Xochimilco.

Villoro, Juan, Rafael Barajas, Montserrat Galí et al.

2013 José Guadalupe Posada: 100 años de Calavera, Fundación BBVA México.

Desastres en grabados: litografías de Posada y namazu-e(cuadro de pez gato) de Japón

Takanori Kobayashi

■ Facultad de Comunicación Internacional, Universidad Senshu, Japón Antropología pública, Area Studies(América Latina)

La forma de registrar y transmitir la situación de los desastres y el proceso de reconstrucción ya no es posible sin fotos o videos. Además, gracias al Internet, podemos recibir rápidamente información de desastres que han ocurrido en el otro lado del mundo, lo que nos permite conocer al instante la magnitud y el alcance de los daños. En el siglo XIX, cuando las tecnologías de comunicación e información aún no estaban establecidas, los folletos y otros materiales de publicación, similares a los volantes, desempeñaban el papel de registrar y transmitir información sobre desastres, mientras la imprenta se arraigaba en la vida cotidiana de la gente común.

El grabador José Guadalupe Posada (1852-1913), quien tuvo una gran influencia en el arte popular de México, produjo más de 20,000 obras a lo largo de su vida. Las litografías de Posada, grabadas en planchas de zinc, delicadas y llenas de fuerza, fueron publicadas en sucesión en los volantes dirigidos a la clase popular. Desde las caricaturas satíricas que presentaban calaveras hasta la creciente agitación contra regímenes dictatoriales, los temas eran diversos, incluyendo accidentes impactantes, crímenes, vida religiosa y milagros de la Virgen de Guadalupe. Él plasmó la maldad y la estupidez humana, así como el disfrute y la ansiedad de las masas, en grabados llenos de humor, utilizando su extraordinaria imaginación y agudo sentido crítico como armas. Este destacado grabador también retrató escenas de desastres como terremotos e inundaciones de aquella época.

El terremoto de magnitud 7.4, ocurrido el 2 de noviembre de 1894, con epicentro en la costa de los estados de Oaxaca y Guerrero, sacudió intensamente la Ciudad de México, que experimentaba un rápido proceso de modernización y un notable aumento de población. Posada retrató la escena de la población sin

recursos frente a edificios colapsados, suplicando al cielo por salvación (figura 1), mientras el temblor que sucedió el 14 de abril de 1907 frente a la costa de Guerrero, con una magnitud de 7.6, retrató el escenario de multitudes evacuando por las principales calles del centro de la Ciudad de México(figura 2).

La característica distintiva de las litografías de desastres grabadas por Posada radica en la reutilización de la misma imagen en impresos que informaban sobre desastres ocurridos en diferentes momentos y lugares. Por ejemplo, los grabados que representaban el desastre sísmico de noviembre de 1894 fueron posteriormente utilizados en un artículo sobre una mujer que perdió la vida por un rayo en 1896, y también se emplearon en artículos sobre la tormenta de 1904 y el terremoto que afectó el estado de Guerrero en 1907. Mientras tanto, otra de las características destacadas fue la inclusión de impactantes titulares como "Terremoto Aterrador". "El Fin del Mundo Está Cerca". "Las Profecías se Cumplen". entre otros, acompañando a las obras de Posada (figura 3 y 4). La combinación de aquellas expresiones y las ilustraciones dejó una fuerte impresión de desesperación y apocalipsis que se extendía entre los siniestrados. Posiblemente, el grabador buscó representar la vulnerabilidad humana al ironizar sobre la creciente disparidad económica en la sociedad mexicana, que se expandía rápidamente con la modernización desigual. En sus obras, sugiere que los desastres afectan de manera similar tanto a los ricos como a los pobres, destacando la fragilidad humana frente al sufrimiento y el dolor, en medio de un desarrollo deseguilibrado.

Cuando Posada nació, al otro lado del Pacífico en Japón, una era de paz estaba a punto de llegar a su fin. En esta época, cuando la cultura popular centrada en la gente común estaba en su apogeo,

-7-

la ciudad de Edo, la capital de Japón de aquel entonces, se enfrentaban a dos amenazas intensas. Una de ellas fue el barco negro de Estados Unidos que apareció en la entrada de la Bahía de Edo en 1853, y la otra fue el gran terremoto que sacudió Edo el 11 de noviembre de 1855. En esa época. Edo, que era una de las principales ciudades del mundo, experimentó un terremoto de magnitud 6.9 con epicentro directo, que resultó en la muerte de más de 10,000 personas y la destrucción de decenas de miles de viviendas. Innumerables personas se vieron afectadas, viviendo en condiciones de desastre. En ese contexto, lo que se difundió masivamente en la ciudad poco después del desastre, a través de los paneles de paja en las calles, fue el grabado "namazu-e", una forma de arte popular que representa al pez gato gigantesco. Esta xilografía se basa en la creencia popular medieval de que los terremotos son causados por el furioso comportamiento de un gran pez gato llamado "jishin namazu" (pez gato del temblor) que habita en lo más profundo de la tierra. Fueron creadas más de 400 grabados de "namazu-e" en tan solo tres meses antes de ser prohibidas por el shogunato y confiscadas las tablas de impresión, realizadas por numerosos grabadores, tanto famosos como desconocidos, incluyendo a Gyosai Kawanabe (1831-1889).

Las características distintivas de las ilustraciones de "namazu-e" creadas durante el gran terremoto de Edo incluyen la diversidad de temas, la proyección de la cultura popular de Edo y un tono humorístico. Después del desastre, los paneles de paja transmitían las escenas desgarradoras del terremoto y la vida en las calles de los domnificados (figura 5). Sin embargo, con el tiempo, surgieron ilustraciones de "namazu-e" con un carácter más amuleto, que representaban la esperanza de calmar las réplicas continuas, controlar los terremotos y eliminar a los peces gato como una especie de talismán (figuras 6 y 7). Con el tiempo, a medida que avanzaba la reconstrucción, algunas representaciones mostraban la figura de un gran pez gato haciendo que los ricos y adinerados vomitaran monedas de oro, mientras los artesanos, como carpinteros y albañiles, prosperando al recoger estas monedas, gracias al auge de la reconstrucción (figura 8). Se

dice que las ilustraciones de "reforma social" de los peces gato ganaron popularidad, ya que buscaban romper con las estructuras de poder consolidadas y crear una nueva sociedad.

A medida que pasaba el tiempo desde el inicio del terremoto, los temas de los grabados de los peces gato iban cambiando gradualmente. Sin embargo, en cualquier caso, las ilustraciones de los peces gato no retrataron el terremoto como un evento de "desesperación" o "fin del mundo". Como señalan estudiosos como Kazuhiko Komatsu y Itoko Kitahara, en el convulso final del período Edo, marcado por eventos como la llegada de barcos extranjeros y la agitación del sistema de shogunato, la figura del gran pez gato desempeñó un papel en aliviar las grandes ansiedades que la gente tenía respecto del posible "fin del mundo". Efectivamente, los grabados "namazu-e" hábilmente reflejaron la cultura popular de la época, ofreciendo una representación humorística de las ansiedades y expectativas en torno a los cambios sociales durante el final del período Edo.

Por un lado, se trata de los registros de un gran desastre que sacudió la Ciudad de México justo antes de la revolución, y por otro lado, de las crónicas de un importante desastre que afectó la capital durante el final del período Edo en Japón, ambos períodos marcados por significativos cambios sociales. Correcto, en esos períodos históricos, no existían las tecnologías de comunicación e información modernas, y no había fotografías ni imágenes en movimiento como las que tenemos hoy en día. La transmisión de información se realizaba principalmente a través de medios impresos, relatos orales y representaciones artísticas. Sin embargo, las litografías de desastres de Posada y las diversas ilustraciones de peces gato nos transmiten cómo la gente común de ese tiempo estaba tratando de considerar los desastres naturales. ¿Se interpretó como el fin del mundo o como un intento de reforma social? La tristeza y desesperación de los afectados, el ánimo y el humor hacia la reconstrucción, algo que no se refleja completamente en las fotografías y videos, sino que está impregnado en la imaginación del pueblo popular.

自然災害とレタブロ(エクスボト)

山越 英嗣 ■ 都留文科大学文学部比較文化学科 | 文化人類学、メキシコ地域研究

メキシコにおいて、さまざまな災厄から奇跡的に生還したさいに、感謝を込めてカトリック教会に奉納する絵はレタブロ、もしくはエクスボトと呼ばれる(以下、レタブロで統一)。レタブロは 15×20cm 程の金属板が使用されることが多く、上部にはその土地で信仰されるキリストや聖母、聖人たちが描かれ、下方には事件の詳細とそこから救われた「奇跡」(milagro)に関する感謝の意が記される。ここで描かれる災厄とは、たとえば病気、手術、交通事故、けんか、強盗、戦争など多岐にわたり、本特集で扱う自然災害も対象となると理解されてきた[佐原 2004:54]。しかしながら、哲学者のシレス・マルガリータ(Zires Roldán, Rosa Margarita)によれば、じつは地震や洪水といっ

た自然災害に関するレタブロは圧倒的に数が少ない。これはレタブロがコミュニティ全体に広く生じた出来事ではなく、むしろ「個人的な苦悩からの救済への感謝」を目的とするためである[Zires 2014]。

こうした信仰の一環としてのレタブロの慣習は20世紀中盤を境に急速に廃れ、現在それはおもに美術品や土産物として制作・販売・流通している。興味深いことに、教会への奉納という目的を離れて流通するレタブロには、自然災害にまつわるテーマを扱ったものが多数みられる。レタブロはその社会的な意味づけを変容させながらも、現代メキシコに生きる人びとの苦悩を表象する役割を担い続けている。

佐原みどり 2004「心象世界としてのエクスボト――メキシコ女性の痛みの表現と死生観」ラテンアメリカ 研究年報 24。

Zires Roldán, Rosa Margarita 2014 Las Transformaciones de los exvotos pictográficos guadalupanos (1848-1999), UAM.



19 de Septiembre del 2017 hubo un terrible terremoto en México y mi hermo quedo atrapado entre los escombros del edificio donde vivía que se deriumb vo después de varias horas, la perrita "Frida" lo encontró y gracias a ella puculvar su vida. Le pido con este retablito a San Francisco de Asís que proteja y inde a Frida y a todos los perritos rescatistas que arriesgan su vida para salvar la nuestra en estos desastres naturales. Magdalena S. \Ciudad de México

メキシコの地震によって倒壊した建物の下敷きになった兄を、 救助犬のフリーダが発見した。 作者はアッシジの聖フランチェ スコに、フリーダや他の救助犬 の無事を祈願している。 Gonzalo Palacios 作成。 2017年9月19日。 Sergey Klisunov "Retablos" (http://retablos.ru/en/tag/ earthquake/) より転載 (2023 年11月18日閲覧)

Desastres naturales y retablo

Hidetsugu Yamakoshi

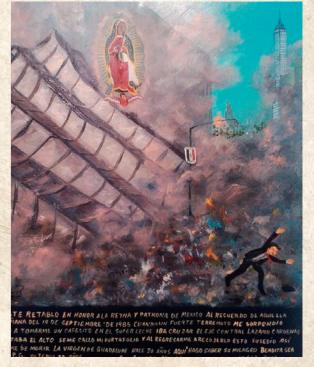
■ Departamento de cultura comparada, Universidad de Tsuru, Japón | Antropología, Estudios Mexicanos

En México, las pinturas que se dedican a la Iglesia Católica en agradecimiento luego de sobrevivir milagrosamente a diversos desastres se llaman retablos o exvotos (más tarde se llamaron retablos). Un retablo suele ser una placa de metal de aproximadamente 15 x 20 cm de tamaño, y en la parte de arriba se representan a Cristo, la Virgen de María y los santos venerados locales, y en la parte de bajo se representan los detalles del incidente y el milagro de la salvación.

Dicen que Los ejemplos de los desastres que se dubujan en los retablos son: enfermedades, cirugías, accidentes de tráfico, peleas, robos y guerras, y también incluyen desastres naturales. Sin embargo, según la filósofa Zires Margarita, una investigadora, en realidad no hay muchos retablos cuyo tema sean desastres naturales como terremotos e inundaciones.

Esto es porque los retablos no fueron dedicados por los eventos que ocurrieron ampliamente en toda la comunidad, sino que tienen como objetivo "dar gracias por el alivio del sufrimiento personal."

La costumbre del retablo rápidamente disminuyo a partir de a mediados del siglo XX, y hoy en día se produce, vende y distribuye principalmente como obras de arte y recuerdos. Curiosamente, muchos de los retablos que circulan fuera del tema de adoración a Dios, tratan de temas relacionados con desastres naturales. El retablo está cambiando su papel social y continúa teniendo un papel en la representación del sufrimiento de las personas que viven en el México moderno.



1985年9月19日のメキシコ地震を描いたエクスボト。作者は戸外にいたため、奇跡的に難を逃れたことをグアダルーペ聖母に感謝している。

Alfredo Vilchis 作成。2005年9月19日。 Sergey Klisunov "Retablos" (http://retablos.ru/en/tag/earthquake/) より転載 (2023年11月18日閲覧)。



- 9

防災マンガ「精霊木の秘密」

シンシア エストラーダ ■ メキシコ国立防災センター | コミュニケーション、文化振興

このマンガは、挿絵と短い文章を通して物語を展開し、学習に役立つ情報源となっている。 読み手の関心と好奇心を引きつける重要な登場人物(①)がいることが特徴で、想定している読み手(②)の服装や伝統、信念、価値観、高齢者の知恵、生き方などに基づいている。この教材は内容を平易にし、視覚的にもわかりやすくしているため、登場人物の体験から学ぶことや、冒険的要素を含む実生活とのリンクが可能である。

『精霊木の秘密』は、土砂崩れの危険性を認識

させ、土砂崩れが起こる前、起こった時、起こった後に、メキシコの山岳地帯の集落で何をすべきかを学ぶことを目的としている。さらに、物語から学ぶことで、教訓やモラルを広めることができる。

このマンガは、汎米保健機構(PAHO)と世界保健機構(WHO)の支援をメキシコ国立防災センターが受けて、農村や先住民が暮らすプエブラ北部高地で実施したコミュニティ・ワークショップの成果であり、地域住民が物語の構想から登場人物、台詞、文体の検証まで参加した。

Cuento ilustrado "El Secreto del árbol"

Cynthia Paola Estrada Cabrera

■ Centro Nacional de Prevención de Desastres, México | Comunicación, Promoción cultural

Este cuento o historia ilustrada es un recurso didáctico muy útil para el desarrollo de una narración a través de ilustraciones y textos breves. Se caracteriza por tener personajes (①) clave que captan la atención y curiosidad de los lectores, toma como referencia el contexto del público objetivo (②), como son vestido, tradiciones, creencias, valores, sabiduría de las personas mayores y formas de vida; elementos fundamentales para que surja la apropiación de los materiales.

Al ser un material de fácil comprensión y muy visual, permite un aprendizaje basado en la experiencia de los personajes y su vinculación con la vida real con un componente de aventura. En "El Secreto del árbol" se busca concientizar a la población sobre los peligros de los deslizamientos de laderas (③) y brindar recomendaciones sobre qué hacer, antes, durante y después de que suceda en una

comunidad como la del cuento, que refleja mucho de las comunidades en las montañas de México. Además, permite difundir moralejas o lecciones, a partir de la historia y su reflexión, misma que se va difundiendo de mano en mano a través de este tipo de materiales de comunicación que son aceptados por el público infantil, pero que también son del gusto de las personas adultas.

Este cuento ilustrado de "El Secreto del árbol" fue resultado de talleres comunitarios realizados por la Organización Panamericana de la Salud (OPS) y la Organización Mundial de la Salud (OMS), con el acompañamiento de Cenapred, en la sierra norte de Puebla, donde habita población rural e indígena que participó desde la conceptualización de la historia hasta la validación de personajes, diálogos y estilo.







ラジオ小説『黒い川』

ナシェリ・アレジャノ ■ メキシコシティ総合リスクマネージメントおよび市民保護省 デジタル文化、リスクコミュニケーション

ラジオ小説『黒い川』は、2013年にメキシコを襲ったハリケーン・イングリッドとマヌエルを生き抜いたゲレロ州山間部の人々の物語である。全10話で構成され、ハリケーンの上陸前、通過中、通過後にとるべき対応策について、住民の意識を高めることを目的としている。登場人物と音声はすべて、ゲレロ州マリナルテペック市ティラパ地域とパラへ・モンテロ地域の住民であり、前述のハリケーンによって甚大な被

害を受けた人々でもある。いくつかの章では、 村人の体験が描かれるだけでなく、先住民言語 であるトラパネコ語(Me'phaa)でも収録され ている。

このラジオ小説は大学やコミュニティのラジオ局で放送されている。また、サウンドクラウドなどのオンライン・プラットフォームでも聴くことできる。





RÍO NEGRO, RADIONOVELA

ARELLANO, Nasheli

■ Secretaría de Gestión Integral de Riesgos y Protección Civil CDMX | Cultura digital y Comunicación del Riesgo

Río Negro es la historia de los pobladores de la Montaña de Guerrero que vivieron los impactos de los huracanes Ingrid y Manuel en 2013.

En 10 capítulos se busca concientizar a la población sobre las medidas de prevención que se deben tomar antes, durante y después del impacto de un fenómeno hidrometeorológico.

Todos los personajes son pobladores de la comunidad de Tilapa y Paraje Montero, del municipio de Malinaltepec en el estado de Guerrero. Comunidades que fueron gravemente impactadas por huracanes, antes mencionados. Algunos de los capítulos además de ilustrar las vivencias de los pobladores recuperan la lengua nativa de los habitantes que es el me'phaa (tlapaneco).

La radionovela ha sido difundida en radios universitarias y radios comunitarias. También está disponible en plataformas digitales como SoundCloud.





メキシコ国立防災センター

トマス・サンチェス

シンポジウムで発表されたテーマは、すべての文化的表現が何らかの言語やシンボルを使用していることを認識させてくれる。それは、特定の時代や場所において、私たちが物質的かつ社会的環境をどのように解釈し、またどのようにそれらが関係し合っているかを明確に示してくれる。一方、過去に起こった重大な出来事や緊急事態、災害は、個人的かつ集合的な記憶として、または文化的表象として、あるいは時代を超えた芸術的表現として記録される。そしてそれらを回復し、保存することが重要である。

メキシコでは、16世紀のフランシスコ会の宣教師であり歴史家であったベルナルディーノ・デ・サハグンの民族誌的著作に具現化された文化的遺産から、先ヒスパニック期のメキシコの歴史とコスモビジョンを回復し研究することが可能となった。彼の研究は、コスモビジョンを理解することは同じ言語を学ぶことを意味し、それを共有することが民族のアイデンティティの構築に寄与することを示している。

行動科学、特に心理学では、人間は自分の感情や信念に基づいてリスクを判断・評価するとされ、そのため、リスクに対する反応や認識は主観的であり差異を生む。災害や特定の歴史的文脈における文化表現の分析において、このことを念頭に置くことは、防災・減災を目指して行う社会への介入を促進することにつながる。

あらゆる形態の芸術表現を認めていくことは、住民の参加と意識を高めることにつながる。したがって、芸術を(社会科学や厳密な)科学と結びつけることは、リスク軽減のためのコミュニケーション戦略として、より広く利用されるべき強力なツールと見なされるべきである。

Comentarios al simposio

Centro Nacional de Prevención de Desastres Tomás Sanchez

Los temas presentados en el simposio permiten reconocer que toda manifestación cultural utiliza algún tipo de lenguaje y simbolismo, lo que muestra claramente cómo interpretamos nuestro entorno físico y social en un tiempo y lugar específicos, pero también cómo nos relacionamos con él. Por otra parte, los eventos críticos, emergencias o desastres que han ocurrido en el pasado quedan registrados en la memoria individual y colectiva de nuestros pueblos, y también en los acervos culturales, algunas veces como expresiones artísticas que trascienden en el tiempo, por lo que es importante recuperarlas y preservarlas.

En México, a partir del legado cultural plasmado en las obras etnográficas de Bernardino de Sahagún, misionero Franciscano e historiador del Siglo XVI, ha sido posible recuperar y estudiar la historia y cosmovisión del México prehispánico. Su trabajo demuestra que entender la cosmovisión implica aprender un mismo lenguaje, y compartirla contribuye a la construcción de la identidad de los pueblos.

Las ciencias que estudian el comportamiento, particularmente la psicología, confirman que el ser humano juzga/valora el riesgo a partir de sus sentimiento y de sus creencias, lo que conduce a que las percepciones y respuestas ante el riesgo sean subjetivas y diferenciadas. Tenerlo presente en el análisis de las expresiones culturales en torno a los desastres y en un contexto histórico específico, puede facilitar las intervenciones sociales que se implementen para el manejo del riesgo de desastres.

Fomentar la expresión artística en todas sus modalidades favorece la participación y sensibilización de la población. Por ello, vincular el arte con las ciencias (exactas y sociales) debe considerarse como una herramienta muy poderosa que se debería utilizar más ampliamente como estrategia de comunicación para la reducción del riesgo.

国際シンポジウムが結んだ場、開いた地平

専修大学国際コミュニケーション学部 小林貴徳

15 時間の時差を考慮して企画された国際シンポジウムは、日本時間では土曜日の朝から、かたやメキシコ時間では金曜日の夕刻、多くの人が仕事終わりとなる時間帯の開催となった。本シンポジウムのタイトル「災害の描かれ方ーポピュラーアートがむすぶ時間・空間・異文化間」が示すとおり、異なる空間を結びつつ、過去に起きた災害の記憶を現代の視点から検討し、未来へとつなげようとする学際的な意見交換の場となったように思う。異なる文化のあいだでの災害の捉え方の違いを問題提起としながら、防災や減災に向けた取り組みという、共通の関心へと議論の舞台を展開できたのではないだろうか。

日本側からの3名、メキシコ側からの2名(+コメンテーター1名)による各報告の詳細は本冊子の記事より確認いただくとして、以下では、ウェビナーレポートやシンポジウム後に実施した参加者アンケートの回答をもとにして本シンポジウム実施の意義を確認したい。

まず、われわれ主催者を驚かせたのは、その事前登録者の数だった。シンポジウム開催のチラシ作りを本冊子の編集や原稿集めと同時に進めていたため、開催の通知開始が予定より大幅に遅れてしまった。それでも Google フォームを利用した事前登録は、通知開始後 1 週間で 50 名ほどに、2 週間後には 300 名を超えた。その時点ですでにわれわれの予測を上回っていたのだが、その後の勢いは想定の範疇を完全に超えたものとなった。シンポジウム開催 2 日前の段階で登録者数が 1300 名を超えたのである。事前登録の締め切りを予定より一日前倒しなければならなかったほどにその勢いは続いていた。

実際のシンポジウム参加者数はのべ948名であり、同一アカウントの出入りを差し引いた実質参加者数は565名だった。事前の登録者数ほどでないにせよ、この規模の企画としては申し分のない参加状況といえる。特筆すべきは参加者の数ではなく、その多様性だった。メキシコを中心として、日本、中国、スペイン、エルサルバドル、コロンビアからのアクセスがみられた。とくに全体の80%の参加者がメキシコからであり、それも全国の州政府や自治体(ムニシピオ)をはじめ、連邦政府機関や大学機関、消防局や病院、一般企業などさまざまなセクターからの参加だった。防災に直接携わる市民保護局や国立防災センターのほか、国防省、環境省、農畜水産農村開発食料省、全国水委員会、国立統計地理情報院、社会保険庁、国家労働社会保険サービス庁など、政府機関や行政機関からの関心の高さがうかがえる。

シンポジウム終了後に実施したアンケートには、222件の回答が寄せられた。シンポジウムの内容に関する満足度をたずねた10段階評価の設問(0が不満、10は大変満足)では、8以上の評価を下した回答者が205名(93%)にのぼった(10と評価した回答は142名)。ほとんどの参加者が満足だったと回答しているが、どのような点が本シンポジウムを満足たらしめたのだろうか。以下では、アンケートの自由記述欄に記されたコメントを一部抜粋しつつ、本シンポジウムの意義と展望、および課題の整理を試みたい。



A) 災害をめぐる比較文化の視点

「異なる文化の世界観を知ることは興味深い。素晴らしいフォーラムでした。」

「最新の視点にもとづくとてもダイナミックで興味深いセミナーでした。」

「市民防災や減災といった展望について、興味深く、そして新たな視点を備えたテーマが分かりやすく説明されていました。」

「メキシコと日本のあいだの災害やリスクに関する文化を比較するという視点は的を射ている。」

「異なる国の間で防災をめぐって意見交換をするという、ファンタスティックで意義のあるシンポジウムでした。」

「災害に備える文化の啓発という意味でもたいへん新鮮で興味深いセミナーであり、わたし個人としても役立つ方法論を与えてくれました。」

「こうしたイベントの開催は防災に関する情報の発信として国際的に役立ちます。」

「こうしたシンポジウムにもっと参加したい。異なる文化のあいだで、それぞれの差異をどのように受け入れるのかについて 考えることは興味深いです。」



B) アートと災害をつなぐ視点

「被災の苦痛や来る災害への備えの意識が国ごとに異なり、独自に表現されている。災害のような極限の状況がどのようにアートに記録されるのかたいへん興味深い。」

「絵やマンガは子どもたちの関心を惹きつけ、主体的な学びにつながりうる。この手の試みは市民防災への導入として興味深い。」

「アートは防災の教材だけでなく人びとに学びの場を創出し、情報を提供する確実な道のりだと思いました。」

「アートと防災を結び付け、そして協働することはきわめて重要なことです。」

「たとえ言語が異なり、文脈が理解できなかったとしても、描かれた図版をつうじて災害リスクをうかがい知ることができます。」

「歴史的にのこされたポピュラーアートの事例から、地域や文化ごとに異なる災害の捉え方や記憶の継承・保存の方法などを知ることができました。」

「防災に関する教育や啓発においてアートに可能性を感じました。説得よりも共感や没入、専門家からのトップダウンよりも市民が親しむボトムアップのメディア、知恵の重要性を感じました。」

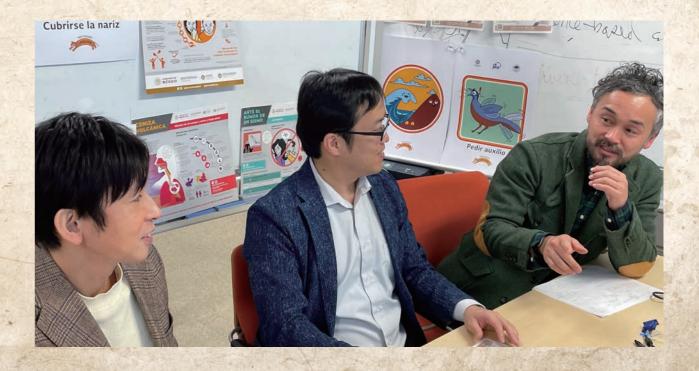
日本とメキシコの研究者による発表で構成され、かつ過去の災害の記録から、現代の実践的な防災の取り組みを結びつけることが本シンポジウムのねらいであり、参加者のコメントからも災害をめぐる比較文化の視点に言及した評価が多くみられた。また、比較文化の方法論として、アートを、それもポピュラーアートを柱とするテーマ設定は、それ自体に新規性や話題性があるだけでなく、実践面においても効果的であり、汎用性に富むとの声が寄せられた。防災の取り組みに携わる実務者や公職者が多い(と思われる)参加者にとって、理論だけに留まるのではなく、いかに社会実装できるのか、また、その際の課題や注意点について具体的な実践例を示したことが反響をもたらしたと思われる。

他方、少数ながら本シンポジウムへの要望や、課題とすべき点についてのコメントも参加者から寄せられていた。た とえば講演資料の共有である。発表時の画面共有だけでは追い付かない、文字が小さいなど、対面実施の場合でも寄せ られうる要望である。シンポジウムの録画映像をウェブ上で公開してほしいという意見もあった。こうした要求につい ては本冊子がその役目を果たしてくれることを期待したい。そのほか、課題とすべき点がふたつ挙げられる。

ひとつはオンライン会議特有の問題であり、登壇者と参加者とのあいだでの質疑応答や意見交換が十全ではなく、意思疎通が一方通行になってしまう問題である。チャット機能を利用して質問を募っていたものの、時間の都合上、対応することができなかった。質問をした参加者には不満が残ったに違いない。もう一つの問題は音声である。今回のシンポジウムは3チャンネル展開で日本語とスペイン語の同時通訳者をそれぞれ配置するという体制であった。そのため、通信環境といった要因もあるだろうが、一部の参加者には声が聞き取りにくい、全く聞こえないという問題が発生していたようだ。そもそもウェビナーにサインインできなかったという声もあった。オンライン会議を実施する以上、避けられない問題ではあるが、今後の取り組みではぜひ改善できるよう努めたい。

過去に生じた災害の記憶を現代に受けとめ、未来へとつなげようとする本シンポジウムは、異なる文化的背景を持つさまざまな人をオンライン会議ツールで結んだ。シンポジウムの二時間は、災害の脅威と防災への取り組みという関心が、国や地域を超えて共有されていることを実感するにはあまりある時間となった。アンケートの回答欄には本シンポジウムの次なる開催を望む声、定期的で継続的な実施を求める声が少なくなかったし、わたしたち開催者もそれを強く望んでいる。こうした意見交換の場を継続していくことこそ、時間や空間をこえた防災文化の醸成に結びつくと確信している。

オンライン会議ツールである Zoom ウェビナーを用いた本シンポジウムは、3 チェンネル(オリジナル音声、日本語、スペイン語)展開とし、日本語とスペイン語のチャンネルにそれぞれ通訳者を配置した同時通訳で進行した。



-15-

El tiempo unido y el horizonte abierto por el simposio internacional

Takanori Kobayashi

Considerando la diferencia de 15 horas, el simposio internacional fue planificado para que en Japón comenzara en la mañana del sábado, mientras que en México sería en la tarde del viernes, coincidiendo con el horario en el que mucha gente finaliza su jornada laboral. Como indica el título de este simposio "Cómo se representan los desastres: la expresión artística, conector de cultura, tiempo y lugar", pareciera que se convirtió en un espacio de intercambio interdisciplinario que busca vincular diferentes espacios, examinar desde una perspectiva contemporánea la memoria de desastres pasados y conectarlos con el futuro. Mientras se plantean las diferencias en la percepción de desastres entre diferentes culturas, se ha logrado abrir un espacio de discusión con un interés común para la prevención y reducción del riesgo de desastres.

Del lado japonés, contamos con tres participantes, y del lado mexicano, con dos y un comentarista. Para conocer en detalle cada ponencia, te invitamos a consultar los artículos de este folleto. A continuación, presentamos los principales resultados de este simposio basándonos en el informe del seminario web y en las respuestas de la encuesta realizada a los participantes después del simposio.

Lo primero que nos sorprendió como organizadores fue el número de personas preinscritas. Debido a que estábamos trabajando en la edición de esta publicación y recopilando artículos al mismo tiempo que diseñábamos el folleto para anunciar el simposio, la notificación inicial sobre la celebración del simposio se retrasó considerablemente en comparación con lo planeado. A pesar de ello, el registro previo utilizando Google Forms atrajo a alrededor de 50 personas dentro de la primera semana después del inicio de las notificaciones, y más de 300 personas dos semanas después. En ese momento, ya había superado nuestras expectativas, pero el impulso posterior excedió completamente lo que habíamos anticipado. Dos días antes del simposio, el número de registrados superó los 1300. El impulso era tal que tuvimos que adelantar el cierre de las inscripciones un día antes de lo planeado.

El número total de participantes en el simposio fue de 948 personas, y el número real de participantes, descontando las entradas y salidas desde la misma cuenta, fue de 565. Aunque no alcanzamos el número de preinscritos, la participación en este evento fue muy satisfactoria. Cabe destacar no sólo la cantidad de participantes sino su diversidad. Se registraron accesos desde México, con presencia de Japón, China, España, El Salvador y Colombia. Especialmente notable fue que el 80% de todos los participantes eran de México, y entre ellos había representantes de diversos sectores, incluidos gobiernos estatales y municipales, instituciones gubernamentales federales y universidades, así como cuerpos de bomberos, hospitales, empresas privadas y otros sectores. Se puede notar un alto interés por parte de agencias gubernamentales y organismos administrativos, como SEDENA, SEMARNAT, SAGARPA, CONAGUA, INEGI, IMSS, ISSSTE, áreas de Protección Civil y el Centro Nacional de Prevención de Desastres, que están directamente involucrados en la gestión del riesgo de desastres.

Se recibieron 222 respuestas en la encuesta realizada después de la finalización del simposio. En la pregunta de evaluación de 10 puntos sobre la satisfacción con el contenido del simposio (donde 0 representa insatisfacción y 10 extrema satisfacción), 205 encuestados (93%) dieron una calificación de 8 o más (142 de ellos calificaron con un 10). La mayoría de los participantes se mostraron satisfechos, pero ¿qué aspectos del simposio recibieron altas calificaciones? A continuación, intentaremos resumir la importancia y perspectivas del simposio, así como los desafíos, retomando algunos comentarios de los participantes.

Desde la voz de los participantes

A) Una mirada comparativa de las culturas sobre desastres

"Excelente foro, interesante ver la cosmovisión de las diferentes culturas."

"Un seminario muy dinámico, con temas de muy interesantes y actualizados."

"Estoy fascinada con habilidad para exponer la esencia de ambas culturas en materia de riesgo. Entenderlo mejor es una de las actividades que han realizado conjuntamente y que merece mayor difusión."

"Una presentación muy bien explicada con un tema nuevo e interesante desde la perspectiva de la protección civil y la reducción del riesgo de desastres."

"Me pareció un evento muy acertado ya que permite hacer una comparación entre la cultura de desastres/ riesgo que predomina entre nuestros países México y Japón."

"Fantástico el simposio, muy nutritivo, muy buena información y ver la interacción de la prevención con otros países."

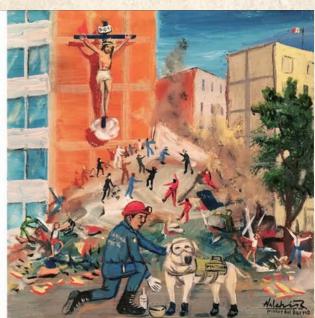
"Me pareció una ponencia muy interesante y considero que este tipo de eventos ayuda a la difusión de información relacionada con el riesgo de desastres a un nivel Internacional."

"Me pareció une vista muy fresca e interesante para difundir la cultura de la prevención a sectores poblacional más dispersos, me dieron estrategias para abordar temas con mi personal."

自然災害のレタブロ 2 Retablo de desastres naturales 2

- 2017年9月19日のマグニチュード7.1の地震で倒壊したロマの建物から、ボランティアと救助隊員、そして海軍特に犬のフリーダが生き延びて4人を救い出したことに、私たちは神に感謝します。
- Damos gracias a Dios porque voluntarios y rescatistas junto a la Armada y en especial a la perrita Frida, lograron encontrar con vida y salvar a cuatro personas de un edificio en Roma que se derrumbó por el terremoto de magnitud 7.1 del 19 de septiembre de 2017.

Daniel Vilchis, 2017



Damos gracias a Dios que voluntarios y rescatistas junto can la Marina y enespecial a esta perrita Frida que con su alluda lograron encontrar a cuatro personas con vida y ser rescatadas en la cal.
Rama - enun edificio quese vina abajo por el sismode Xigradosella seris in

B) Una mirada que vincula el arte con los desastres

"Es muy interesante como el arte en general logra retratar situaciones comunes y extremas como un desastre natural y que cada país tiene su propia manera de expresar desde el dolor y prevención."

"El arte siempre ha sido y será la ruta más segura de informar y educar a la población no solo en materia de protección civil."

"Es muy importante el último comentario de la charla de hoy, vincular el arte con la prevención y hacer un trabajo conjunto para le prevención es de suma importancia."

"Me parece interesante como a través de las imágenes se puede interpretar los riesgos, aparte de que, aunque no entiendas el idioma puedas entender el contexto."

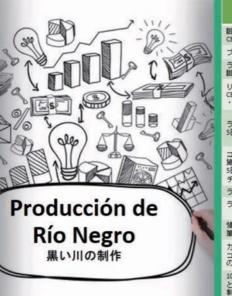
"Es muy interesante este tipo de introducción a la protección civil porque por medio de ilustraciones en historietas se interesa la población infantil y empezar con la autoprotección."

"Desde ejemplos de arte popular históricamente transmitidos, pudimos aprender sobre las distintas percepciones de los desastres y los métodos de preservación y transmisión de la memoria de estos, que varían según la región y la cultura."

"En términos de educación y concienciación sobre la prevención de desastres, sentimos que el arte ofrece posibilidades. Valoramos más la empatía y la inmersión que la persuasión, y reconocemos la importancia de los medios y el conocimiento de abajo hacia arriba, donde los ciudadanos se comprometen más que los expertos de arriba hacia abajo."



Actividad a desarrollar	Personal Requerido
Asesoría a CENAPRED para redacción de guiones	2 asesores
Revisión y corrección de Escaleta	1 editor literario
Adaptación de 10 guiones de radionovela	1 guionista
	1 editor literario
Asesoría al equipo de CENAPRED para realización de ensayos	1 asesor
	2 productores
Grabación de radionovela cinco días	2 asistentes de producción
	1 ароуо
Viáticos para grabación cinco días en comunidad	5 personas
Traslados a Chilpancingo	-0.
Narrador de radionovela	2 voces
Edición de 10 capítulos de radionovela	2 productores
	1 musicalizado
Redacción de 10 guiones para cápsulas informativas	1 guionista
Traducción a tlapaneco de guión de cápsulas (solo locutor)	1 traductor
Grabación y producción de 10	1 productor
cápsulas en español y tiapaneco	3 voces



脚本作成に関する	コンサルタント2名
CENAPREDへの助言・指導	
ブロットの検討と修正	編集者1名
ラジオドラマ脚本10本の 脚色	脚本家1名 編集者1名
リハーサル実施に除して CENAPREDチームへの助言 ・指導	コンサルタント1名
ラジオドラマの収録 5日間	ブロデューサー2名 ブロヂューサー助手 2名 サポート1名
コミュニティでの収録実 施のための旅費・手当 5日分 チルパンシンゴ移動	人員5名
ラジオドラマナレーター	2声
ラジオドラマ10章の編集	プロデューサー2名 音楽担当者1名
情報カブセル10の脚本執 筆	脚本家1名
カブセル脚体のトラバネ コ語翻訳(アナウンサー のみ)	翻訳者1名
10カブセルのスペイン語 とトラパネコ語で収録と 制作	ブロデューサー1名 3回

En el simposio participaron investigadores de Japón y México, con el objetivo de vincular las prácticas contemporáneas de prevención de desastres con registros de desastres pasados. Se observó que muchos comentarios de los participantes hicieron referencia a una valoración que destacaba una perspectiva de comparación cultural sobre desastres. Además, en cuanto a la metodología de comparación cultural, el enfoque en el arte, especialmente en el arte popular, no solo se consideró novedoso y relevante en sí mismo, sino que también se señaló como efectivo en términos prácticos y rico en aplicaciones. Para los participantes, muchos de los cuales son profesionales y funcionarios públicos involucrados en iniciativas de prevención y atención de desastres, parece que el hecho de ofrecer ejemplos concretos de prácticas y señalar los desafíos y a cuidar al implementar las intervenciones en la sociedad, en lugar de quedarse solo en el ámbito teórico, generó un impacto significativo.

Por otro lado, también recibimos comentarios y solicitudes sobre áreas que podrían mejorarse o aspectos que deberían abordarse como desafíos. Por ejemplo, el acceso a los materiales de las presentaciones. Esta es una solicitud que toma sentido incluso en eventos presenciales, ya que compartir la pantalla durante la presentación no siempre es suficiente, por ejemplo, ante la dificultad de la lectura de textos pequeños, entre otros problemas. También hubo solicitudes para que se publique el vídeo grabado del simposio en línea. Esperamos que este folleto cumpla con estas demandas.

Uno de los desafíos identificados se refiere al problema específico de las conferencias en línea, donde el intercambio de preguntas y respuestas y la discusión entre los oradores y los participantes no son completamente efectivos, lo que puede resultar en una comunicación unidireccional. Aunque se recibieron preguntas a través del chat, debido a limitaciones de tiempo, no fue posible responder a todas ellas. Es probable que los participantes que hicieron preguntas quedaran insatisfechos. Mientras el otro desafío se relaciona con el manejo del audio en idiomas distintos. En este simposio, se estableció un sistema de tres canales con intérpretes simultáneos en japonés y español. Por lo tanto, puede haber factores, como las condiciones de la conexión a internet, que motivaron que algunos participantes experimentaran problemas para escuchar o no pudieron escuchar del todo. También hubo quienes indicaron que no pudieron iniciar sesión en el webinar. Ante la posibilidad de que se presenten problemas inherentes a la operación de conferencias en línea, nos esforzaremos por mejorar en futuras iniciativas de este tipo.

El simposio, que busca abordar y vincular las memorias de desastres pasados con el presente y hacia el futuro, conectó a personas de diversas culturas utilizando herramientas de conferencias en línea. Las dos horas del simposio fueron más que suficientes para percibir que la preocupación por la amenaza de desastres y los esfuerzos en materia de prevención y mitigación se comparten más allá de las fronteras nacionales y regionales. En los comentarios de la encuesta, no faltaron voces que expresaron el deseo de

que se celebre nuevamente el simposio en el futuro, así como la demanda de su realización de manera regular y continua. Como organizadores, también compartimos esta misma convicción. Tenemos la seguridad de que continuar con estos espacios de intercambio de opiniones y experiencias contribuirá a la creación de una cultura de prevención de desastres que trascienda el tiempo y espacio.



El simposio, que utilizó la plataforma de conferencias en línea Zoom Webinar, se llevó a cabo con tres canales (audio original, japonés y español), y se realizó con interpretación simultánea en los canales de japonés y español, con intérpretes asignados a cada uno de ellos.

- 19 -

研究費等の助成金の成果

課 題 名: 災害の描かれ方一ポピュラーアートがむすぶ TLC 京都大学分野横断プラットフォーム 2023 年度

■中野元太

課題名:北中米太平洋沿岸部における巨大地震・津波複合災害リスク軽減に向けた総合的研究 SATREPS (地球規模課題対応科学技術プログラム) 2023 年 - 2028 年

課題番号: JPMJSA2310

課 題 名:支援者と被支援者との間の災害観の差異を克服する国際防災教育支援の理論と実践 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究 2020 年 - 2023 年

課題番号: 20K13901

■山越英嗣

課 題 名:米国のメキシコ先住民移民同郷者会における「伝統知」を通じた他者との連帯

日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究 2021 年 - 2024 年

課題番号:21K13174

■小林貴徳

課 題 名:メキシコ先住民村落部における災害脆弱性の解明:民俗知を活かす地域防災モデルの構築 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 2022 年 - 2024 年

課題番号: 22K12547

課題名:米国のメキシコ先住民移民同郷者会における「伝統知」を通じた他者との連帯

日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究 2021 年 4 月 - 2025 年 3 月

課題番号:21K13174

編集後記

そもそもの始まりは、2021 年 1 月に防災教育・国際支援を専門にしておられる中野元太先生に出した一通のメールからでした。当時のメールを振り返ると、『研究者にとっての「将来の」共同研究者と 1 対 1 での意見交換を通じて、相互に研究交流を深めていただくものです。ここで、すぐに共同研究を始めていただくという趣旨のものではなく研究者が自分の研究を紹介したり、意見を聞きたい研究者との情報交換を通じて、ゆるやかに「交流の場」を醸成できればと考えております。』と書いてあります。

モノゴトはまさにその通りに進みました。まずは中野先生の想定する研究パートナーのキーワードが【中南米、若手、文化人類学】という全くご専門外であることは私の期待以上のものでした。キーワードにマッチしそうな研究者として山越英嗣先生を提案したところ、お二人は初対面からまさに意気投合し、後にレタブロ研究会と呼ばれる研究会が誕生しました。その後小林貴徳先生が加わり、レタブロ研究会はまさに強力な研究会となりました。

何回かオンラインで3名の研究者が議論する中で、レタブロ研究会の方向性がゆるやかに決まっていきました。レタブロ研究会は2023年度の京都大学分野横断プラットフォーム事業の助成を受け、2024年2月の国際シンポジウムや研究成果をまとめた、この美しいパンフレットとして結実しました。

すぐに研究成果を求められるご時世に、このようなゆるやかな交流の場を提供することによって、 伸びやかな研究成果を得られたことに研究支援を生業とする一個人として大変嬉しく思います。

2024年3月

京都大学学術研究展開センター (KURA) リサーチ・アドミニストレーター 村田 卓也

著 作: レタブロ研究会 発行日: 2024年3月〇日

発行所:(株)田中プリント

京都市下京区松原通麩屋町東入ル 677-2

Autor: Retablo Research Group.

Fecha de emisión: x fecha de emisión: 2024 Mar.

Editor: Tanaka Print Co.



